リリカルマジカルなんだってェーッ！？ 叙情的な幻想ってなんなんだっ！？

Star Dust

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルマジカルなんだってエーッ！？ 叙情的な幻想ってなんなんだっ！？

【Nコード】

N9548W

【作者名】

Star Dust

【あらすじ】

リリカルなのは&TOP&TOD&TOD2のクロスストーリー
っ！

神の御使いと名乗る者からデリス・エリュシオンの力で何とか逃げた先は海鳴市だった！

そして半年後、何の縁かは知らないが、この謎の潜む町、海鳴市を

魔物が襲う！

もう、神なんかいない。

Life・0 デリス・エリュシオンのキマグレは次元を越える

「あれから、もう半年かぁ……………」

「そうだね……………」

フリーズキールの宿屋“雪泣手”の中では、調理されたシカの肉をつまんでいる男と机に肘をついて考え事をしている女がいた。

「みんな、元気にしてるかなぁ……………」

「どうだかね……………」

笹原秀司。14歳。

簡単に説明すると、“名前以外の記憶が消えた人間”と言ったトコ。ダオス戦役ではクレスと共に前衛を担い、後に人々は“時空戦士”と呼ばれるようになった。

なりきり士のディオとメルとも知り合い、試練を共に乗り越えた。

まあ、何だかんだあったが、普段の平穏な日々に戻って今はこれだ。

「ロディ姉、ケチャップ取って」

「はいケチャップ」

そして、デリス・エリュシオンのキマグレに振り回されながらロデ

イ姉と旅をしている。

「じゃ、マナが溜まつたら誰かのトコに行こうか」

「うん」

彼女はロンドリーネ・E・エツフェンベルグ。オレの記憶の始まりから共にいた“姉的存在”だ。

余談だが、牛乳を1日1杯飲まなければ締まらないらしい（本人談）
そこに1人の男が現れた。

「あんたら、時空戦士のロンドリーネとシュージだろ？」

「そうだけど……」

「私はアルヴァニスタ魔物研究部の者だ。君達に頼みたいことがある」

「は、はあ……」

「ヴァルハラ平原の最奥から妙な魔物が現れて町を荒らしていくらしい。奥からは精霊をも超えるマナを常に放出しているらしい。最奥の調査の護衛をしてくれないだろうか？」

「断」「いいよ」「ええっ!？」

いつもなら依頼とか断るはずなのに……信じらんねえ……。

「本当か!？」

「うん、本当だよ」

「ありがたい!明日の早朝、使いの者を来させる。明日はよろしく頼もう」

男は宿屋を出て寒空に消えていった。

次の日のヴァルハラ平原。

「で、何で引き受けたんだよ?」

調査隊の人間もいる目の前で聞いてみた。

「何が?」

「この依頼だよ」

「ああ、アレ?」

周りの魔物もほとんどいなくて暇な今のうちに聞いておく。

「精霊以上のマナを常に放出する相手を狩ればマナもかなり溜まるし、それに」

「それに?」

「面白そうだったから？」

……聞いたオレがバカだった。

「マナの溜まり方が凄い……！近くにいるよ！」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

「って近づ！」

鳥のような翼を持つ巨大な獣が現れた。

「グラシャボラスかつ！」

「みんな構えてっ！」

個々に武器をを構える。

「行くぞっ！」

そして、グラシャボラスに斬りかかった。

「ハアツハアツ……」

「ふう……」

「っ、強かった……」

調査隊の人間は疲れを愚痴りながら座り込んだ。

「 !? 」

「 どしたの? 」

「 みんな気をつけて! マナの濃度が上がってきてるよ! 」

「 はあっ!? 」

そうオレが声を上げると、目の前が光に包まれて中から1人の女が現れた。

「 笹原秀司だな? 」

「 誰だ、アンタ 」

「 私の名はエルレイン。世界を救う大いなる神の御使い 」

彼女は一呼吸入れた後、本来の目的とは別の事を口にする。

「 貴様の様なイレギュラーは危険と見た。よって 死んでもらう 」

「 はっ? 」

いきなり何を言うんだこのババアは。

「 デルタレイ 」

三本の光の槍がオレを襲う。

「そおい！」

三本の光の槍を軽々回避し、エルレインに突っ込む。

「愚かな……」

「なっ!?!」

エルレインの足元から出たのは何かの魔方陣のようなもの。

「力が……入らねえっ……!」

衰弱。

彼女の作り出した魔方陣には衰弱させる効果があった。

「死ね」

「っ!?!」

太く大きな槍が背中に刺さる。

「しゅー!」

ロディ姉が後ろから抱き抱えてくれた。

「デリス・エリュシオンが!?!」

「な、なんだってエーっ!?!」

衰弱しているハズなのにここまで叫べるオレにビックリだ。

「みんな逃げて！コイツ、勝てる相手じゃないよ！」

「た、退却だ！退却！」

ロディ姉が叫ぶと調査隊は1人、また1人ともと来た道に戻っていく。

「じゃあね、白い服のお姉さん」

「ダオスめ……死して尚、私の邪魔を……」

アイツ、今、ダオスって

その言葉を考えながら、転移の光に吞まれた。

Life・2 剣が喋ったアアアアツ!

あれから、半年が経った。

「はっ! やっ!」

毎朝の習慣、木刀の素振りをしている。

今日は場所を変えて丘の麓にしている。

「これくらいかな」

木刀を袋にしまつて近くのベンチに座り込むと、自販機で買ったリソゴジュースを一気に飲み干した。

「あー、ウマイ」

一汗流した後の果汁3%濃縮還元リソゴジュースはまた格別にウマイ。って何言つてんだオレは?

空きカンを投げてゴミ箱に入れる。ナイスシュート。

その瞬間、周りを光が包んだ。

「な、何だっただんだ……?」

丘の方から何やら声が聞こえてきた。

なんとなく気がなったからなんとなく耳を傾けたら、とんでも

ないことが聞こえた。

【なんなのよあのアマ！どうせもうすぐアラサーの癖に神の御使いだの何だの、調子くれてんじゃないわよ！】

……正直、聞かなかった方が良かったのかもしれない。

「つか、誰？さっきまでいなかったのに」

【声が聞こえるの！？なら丘のてっぺんに来て！】

何か地雷を踏んだ気がするぞ……。

まあ呼ばれていけないのは礼儀としてアレなので行ってみることに。

そこで見たのは

「 剣？ 」

一本の紫と黄土色で配色されたサーベルが刺さってた。

【そう、それが私よ】

「へっっ………っ て剣が喋ったアアアアッ！」

【 で、落ち着いた？ 】

「 な、何とか…… 」

喋る剣なんて普通、存在しないのでビビってしまった。

【私はウォリス・ハミルトン。この剣、ソーディアン・ウォリスの元となった人格よ】

おしとやかな、いかにも大人という感じの声だ。

【あなた、名前は？】

「オレは笹原秀司だよ」

【というかいつまで刺してるつもり！？】

「す、すみませんでしたっ！」
慌てて剣を地面から抜く。

なにこの剣、スツゲエコワインだけど。だって、いきなり怒ってるんだぜ？あり得ないくらい強い勢いで。

【じゃ、掲げて】

言われた通り、剣を掲げてみる。

【お前の名はって言って】

凄くハメられてる気がするぞ……。

「お前の名は」

【そこで私の名前言いなさい】

「ウォリス！」

【はい、契約完了】

は？契約？

【そうよ。これからあなたが私のマスター。よろしくね、秀司】

「はいいいいっ！？」

「で、この剣どうしたの？」

時も過ぎて、バイトから帰ってきて晩飯を食ってる時、壁に立て掛けておいたウォリスについてロディ姉に聞かれた。

「丘に刺さってたのを拾ってきたんだ」

【ウォリスよ、よろしく】

「よろしく」

あれ、驚かない？

「驚かないの？」

「喋るなら剣の形してても人間。それを驚くのはシツレイってもの

だと私は思っな」

「そっか……」

それもそうだよな……。

「ウォリス、驚いたりしてごめん。ウォリスも、人間なんだよね」

【気にしないで。普通は剣は喋らないもの。驚いて当然だわ】

ウォリスは優しく囁いてくれた。

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ」

ウォリスは怒らせたらコワイが、優しい一面もあるようだ。

「明日は初めての学校だし、そろそろ部屋に入るよ」

明日から“聖祥学園中等部”とかいうところに転入するらしい。

ロディ姉も2ヶ月程前から生活が安定する以上の給料をもらえる喫茶店に勤め始めた。それのおかげで学校に行くハメになったのだ。

若干面倒くさいが、せっかくロディ姉が金を出してくれたので行ってみることに。

「じゃ、お休み」

明日から、波乱の1日が始まる。

Life・2 転校初日は地獄の連鎖

「ねえ、フエイトちゃん」

「どうしたのなの？」

「今日から転校生が来るんだってね」

「そうなんだ」

朝からクラスではこの話で持ちきりのようです。

「なんや？朝から転校生の話で盛り上がってんなあ」

「まあ、この時期に転校生って珍しいもんね」

「そうねえ、どんなヤツなのかしら？」

はやてちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんも若干気になっているようです。

「私のカンだと、男だったらロクでもない奴ね」

「アリサちゃん、会う前から決めつけるのはやめておいた方が……」

アリサちゃんが思った所を素直に言ったのをすずかちゃんが抑えま

す。
「大体、男っていう生き物はロクでもない奴ばかりよ！」

「あ、あはは……」

アリサちゃんは考えに素直過ぎるので、最近はずかちゃんやフェイトちゃん、それに加えて私でも止められません。

「そつやね。下心剥き出しで接してくる人も少なくないし」

「『下心剥き出し』ははやてもでしょ?」

「お堅いなあ〜フェイトちゃんは」

「はやてが軽すぎるだけですっ!」

フェイトちゃんも何故か今回はノリノリです。

「でもフェイトちゃん、よく考えてみ?今までに何回コクられたん?」

「えっと……32回、くらいかな?」

「って告白されすぎなのっ!」

すかさず私もツッコミに回ります。

「というかそんなに告白されてたんだ……。原作の主役である私でも13人が限界なのに……」。

「その内、ニヤニヤしながらコクってきた奴はどれくらいいるの?」

それは聞いたかったな。どれくらいなんだろう？

「……………15人くらい？」

「ってほぼ半分じゃない！」

「本当、ウチの学校は下心満載やな……………」

……………啞然とせざるを得ない気がするの。すずかちゃんもアゴが外れるくらいに口を開けてるし……………。

「ま、それほどフェイトちゃんには色気があるって事やね」

「そうね」

「ありませんっ！」

フェイトちゃんの顔が真っ赤になっちゃいました。

アリスちゃんもはやてちゃんもすずかちゃんも笑っています。当然私も。

「みんな席つけ、ホームルーム始めるぞ」

転校生はどんな子なんだろう？楽しみだなあ……………。

「みんな知ってると思うが、転校生を紹介する」

うわー、なんか無駄に緊張するなー……。

扉の向こうから色々聞こえてくる。男かな？女かな？とかどんな奴なんだ？とか。

「あー、静かに。では入ってきなさい」

遂に来たよこの瞬間。嫌に疲れるこの時。

教室の扉を開けて中に入る。

男共から大きな落胆の音が。うるさいぞ男共。オレが美人の女転校生だったら良かったのに、とさぞ思っているだろう。

「笹原秀司と言います。よろしくお願いします」

初の中学校生活は非常に味気のない挨拶から始まることになった。

初めての休み時間。

転校生に取っては恐らく苦痛でしかないだろう。なぜなら、オレもそうだから。

「どこから来たの？」

「前の学校はどうだったの？」

「……ヘルペスミー（泣）」

この通りだ。

オレはこの世界でいう聖徳太子とやらではないので、複数人の話を聞き分けて返答する、といったことは出来ない。

「ちょっと!」

そこで助け船をだしたのは濃い目の金髪の女の子。

「この子混乱してるじゃない!」

コイツは女番長か?

彼女が声を出すと瞬時にみんなが静まるのを見て思わないヤツはいないだろう。中には怯えだすヤツもいたし。

「いい? 1人ずつ、さすがさんじゃないか!?」っ!?

「秀司君、おはよう」

人見知り発見っ! これでこの地獄からはオサラバだ!

「どうしてこんな所に?」

「それはこっちのセリフだよ」

「なになに? 2人はどんな関係?」

ニタニタしながら男子生徒が聞いてくる。

「いや、特に何でも……」

「月村さん、どうなの？」

こちらもニタニタしながら聞いてくる。

気づいたらあっちもニタニタこっちもニタニタで助け船を出した張本人の金髪の子もニタニタしてた。

結果的に、地獄からオサラバどころかすずかを道連れにしてしまったのだった。

その頃、教室の端では

「転校生の癖に俺のハーレムに手を出すとはな……」

1人の男がいた。

「まあいい。いずれ、決着をつけてやるからな……」

男はその場を離れた。

秋。

葉が茶色に色付く今日この頃。

窓際に席の決まったオレはというと

「……すかー」

寝ていた。

「転校生だからって容赦しねえぞ。おい、起きろ!」

先生が頭を叩く。

「……すこー」

「コラっ!起きんかっ!」

「……アーチエ、それはカレーなんかじゃないよ」

「ふんっ!」

「あいだあっ!?!」

教科書の角で叩かれてやっと起きたのだった。

「なにするんすかっ!」

「寝るなっ!」

「寝てませんっ!」

「ならこの式を因数分解してみろっ!」

「んなもんわかるかつ！」

オレにこんなもんわかる訳がねえ！

「今日も空が青いなあ……」

前の数学で先生にこっぴど絞られて満身創痍のオレは青い空を見て和む。

体育の時間。

体育館では剣を振るって戦う練習の様なものをやっていた。正直、これの存在意義があるのかどうか疑問なのだが。

「はっ！」

「やっ！」

竹刀の合わさる音が絶え間無く鳴り響く。見学は楽で良い。

「ぶんっ！」

「うわっ！？」

あれ、目の前から竹刀が……。

「そりゃっ」

飛んできた竹刀を白羽取りしてしまった。

周りから歓声が聞こえる。そんなことはいいんだ。

なに取ってんだ。当たって気絶してこのあとの授業サボるんだろうが。

「これ飛ばしたヤツ、誰？」

しら〜っ。誰からも反応なしって悲しくなるよね！

「お前だろ？」

舞台から降りてソイツの前に行く。

他のヤツとは違い、ソイツは見た目がかなり異なる。

緑と茶色のオッドアイのオレンジ頭だったのが印象に残りそうだし、イケメンすぎるし。

「何を言ってるんだい？僕がやるわけじゃないじゃないか」

正直に言おう。

コイツ、胡散臭せえ……。

「オレが空みて現実逃避してたからって見てないとも？」

「わかったわかった。これは明日の体育の中の試合で決着をつけよう」

何言っただこの先生。見学のヤツに竹刀を振って汗をかけと言っのかこの鬼教師め。

「だ、そうだ。先生もそう仰られているが、どうする転校生？」

「じょーとーだー」

やる気出ねえ……。

昼休み。

明日の為に、体育館に再び訪れて竹刀を握っていた。

「竹刀ねえ……」

感触が若干気になる所があるが、まあなんとかなるだろう。

「秀司君、大丈夫？」

「何が？」

すずかさんが話しかけてきた。

「山重君のことだよ」

あれ山重っていつのか。

「運動神経も勉強もずば抜けて凄いんだよ、彼」

「ま、アイツあんまり好きじゃないけどね」

「あ、さっきはありがとう。キン・パツ子さん」

助け船を出してくれた子だ。裏切ったけど。

「キン・パツ子って誰よ！私はアリサ・バニングスよ！」

「ア、アサ　なんだって？」

「アリサ・バニングスよ！」

「おーけーおーけー、アサリ・バーニングだな」

「ア・リ・サ・バ・ニ・ン・グ・ス！」

「笹原君もアリサちゃんを弄るのはその辺にしなよ？」

イジるのに制止がかかる。

「君達は確か　」

「「「うんうん」」」

「　誰だっけ」

「「「おいつ！」」」

「2つ前の席の高町なのはなのっ！」

「廊下側の最後尾の席のフェイト・テストロッサ・ハラオウンですっ！」

「教卓の目の前の八神はやてやつ！」

教卓前とかかなり哀れだと思っね、うん。

「高町さんとテストロッサさんと八神さんな。よし、覚えた」

「私の名前は？」

「アサリさんでしょ？」

「アリサよっ！」

なんて難しい名前なんだっ！

「全っ然難しくないわよっ！」

「まあまあ………」

「アリサ、落ち着いて………」

すずかさんとテストロッサさんが制止を呼び掛けるが、抑えきるに至らないようだ。

「さーて、昼飯食おうかね。時間もなし」

ビニール袋を開いて中から黄色の物体を取り出す。

「いただきます」

「「「「「つてちよつと待てイっ！」「」「」

「何さ？」

「今日のお昼ご飯、それだけ？」

高町さんが聞いてくる。

「そうだけど」

本日の昼飯は手に持っている黄色い果物、バナナオンリーだ。

「そんなのダメだよ！量も栄養も少なすぎるよ！」

「もつとまともな物食べるべきやな」

「食を怠っちゃダメだよ秀司君」

「第一、何この昼食は！食後のデザートじゃない！」

皆さん口々に言うんですね……。ひどいなあ……。人の昼飯にケチつけて。

「ひどいなあ……。バナナをバカにしてるの？」

何か空気が失せてきたのでさっさと口に詰め込んだ。

「……じちそじちま」

バナナの皮をビニール袋に詰めて、その場を立ち去った。

Life・3 味噌キユウはネ申

次の日。

「遅刻だああああっ！」

2日目から遅刻が確定となった。

8：27という、もはや絶望的な状態でも時計の針は止まってくれない。

ロデイ姉は駅前の喫茶店のバイトで朝早くから夜遅く、と言っても8時くらいまででない。働き者だな、ロデイ姉って。

「行ってきますか！」

言い訳でも考えますか。

「小林」

「はい」

「笹原」

席にはいない。ただの空席のようだ。

「遅刻k」待ったああああっ！」「？」

「お疲れ、笹原。どうして遅刻したんだ？」

言い訳考えながら来たんだ！これで遅刻は取り消しじゃあっ！

「横断歩道を渡ってるおばあちゃんの手助けをしたら目覚まし時計が壊れてておばあちゃんのお家まで付き添ってあげたら」

「日本語に再翻訳して出直してこい」

「ひどっ!?!」

先生冷たっ！渾身の言い訳だったはずなのに！

教室の至るところから笑い声が聞こえる。試しに教卓前の八神さんを見てみよう。

「あはははは！ひーっ！だずげで笑いじぬっ！」

腹を抱えて笑っていた。なんて失礼な人なんだ！人を笑うなんて！

「取り敢えず、お前遅刻な」

「あるうえ〜?」

今日もまた、地獄が始まる。

「という訳で、席替えだ」

何故こうなった……。

1限が担任の授業だからって席替えしようなんて言ったヤツはどこのバカだ？

「クジ引いて〜」

まあ良いか。今はクジ引いて良いトコゲットが最優先事項だろう。

「なんとということだ……」

まさかの教卓前。

オレオワタ〜(^ O ^)ノ

「先生、黒板見えないです」

前のオレの席には知らないクラスメイトが。

「じゃあ替わっても良いって奴いるか？」

「はいはい！います！いますよー！」

何とかアピールして変えてもらわねば……！

「わかった！わかったから静かにしろ！東山、ここで良いか？」

「構いません」

よっしやああああっ！

東山さんマジ神っす！さっき初めて知ったけど。

周りが女？よくありがちなリア充ルートだが、なに気にすることはない。

「よろしくね、笹原君」

「今日から隣だから、わからないことあったら聞いてね。一応、私も転校生だったから」

隣や前は一応知り合い。マジ神っす東山さん。

「あゝ、うんよろしくテストロッサさんと、え」と

誰だったっけ？

「高坂さん？」

「高町だよ！高町なのは！」

あらっ？違っただっけ？

「昨日のおさらいします。酸素と水素が混ぜると水ができます。式で表すとこうですね」

黒板には $H + O_2$ H_2O と書かれる。

水素が何故 H だし。こんなイミフなモンを作ったヤツ誰だよ……。

昨日、テストロッサさんのご教授により何とか覚えたが、ものの10分ももたず忘れた。

「この式は数が釣り合ってませんね？ 釣り合わせるにはどうすれば良いですか？ じゃあ笹原君、答えて？」

「……」

ダメだ、全っ然わっかんねえ。いざ見てみると、忘れるのに10分もかかんなかった。

「あ、あの〜、大丈夫？」

「わかんないっす！」

「胸を張らないでくださいね？ わかんなかったらちゃんと聞くように。では」

昨日のようなことにはならなかったことを幸運に思いたい。

「笹原君、ちゃんと家で勉強してる？」

「ぎっくり行くなあテストロッサさんは」

顔を見ると超不機嫌。

休み時間ならば真つ先に土下座に洒落込むだろう。それ以前のステ
ップは跳ばしまくりだ。

「してるよ、別の意味で」

「本来の意味だったら？」

「してるよ」

「本来の意味だったら？」

「だからして」「本来の意味だったら？」……してないっす」

まさかこんなトコで無限ループとは……。

「やっぱり……」

予想してたのかよ。

「だって教科書読んでもサツパリングなんだもん」

「なら今日から家でその日やった分の教科書とノートを全部覚えて
きて。明日から毎日テストするから」

「オレオワタ」

正直に言ったらこれかよ……。

「キュウリウマー」

本日の昼食は緑の少し曲がった野菜、キュウリだ。

「あんだ、また食を怠ってるでしょ」

出口の方を見るとアサリさん達がこちらに近づいてくるのがわかる。

「アサリさん達が……」

「アサリじゃなくてアリス！いつになったら覚えるのよ！」

「ご、ごめん！オレ、人の名前覚えるの苦手なんだ……」

アリスさんにはかなり失礼なことをしているのがよくわかる。

……反省しよう。

「今日はキュウリだけ？」

すずかさんは、オレの持つキュウリをみてそう言った。

「そーだよ」

「でもお腹に溜まらないし、何より栄養が片寄っちゃっしょ？」

ぐっ……テストロッサさんは痛いトコをついてきやがる。

「家族の人に作ってもらえば？」

何とか許してくれた高町さん。この人はMの素質がない限り、相手にはしたくない。

「姉さんは朝早くからバイトでいないし、オレにはそれ以外の家族はいない」

逃げることを選択。

「自分で作るうということはないんか？」

「ない」

強いて理由を挙げるとなれば、面倒だから、といったトコか。

どちらにせよやる気はない。

「若干味に不満。次回は味噌を持参すべきだな……」

「……………不満だったんかいっ！……………」

味噌キュウというものに進化した途端、ネ申レベルのウマさに変化する。急ぎすぎて味噌忘れたけど。

「そこうるさいよ。味噌キュウをバカにするヤツはキウイにでもなっつけてしまえ」

半分ほど残ったキュウリをスゴい速度で消費する。

「……………ごちそうさま」

ビニール袋をゴミ箱に叩き入れ、竹刀を手に取った。

「アンタ、この調子で大丈夫なの？」

「大丈夫だ、問題ない」

そして迎えた本日最大のイベント。

「これより、授業を始める」

どんなイレギュラーかは知らないが、ピンク髪のポニテ剣士様（和風ber）が生徒の前に鎮座している。

「本日は、担当の高橋先生が体調を悪くされたので代理で来た。八神シグナムだ」

八神シグナムう？八神って……あの八神？

「まずは素振りだな。素振り300回！」

なんて面倒な願いなんだ。毎日ウオラスとやってるから慣れてるけどな。

「はいっ！」

やる気出ねー……。

Life・4 先生はバトルマニア!……そりゃないわ

「そいつ!」

「あうっ!」

模擬戦ねえ……。

「元気だねえ、皆……」

体育館の端で空気になりつつあるオレは、自分から目立とうとはしない。何故なら、面倒だから。

「お前、そこで何をしている?」

オレの空気化計画が失敗に終わった。

シグナム先生がオレのに目の前に現れ仁王立ち。

「この授業何がしたいのかサツパリング」

剣なんてやっても、平穩なこのご時世、意味あることは何も身に付かないだろう。

「ふんっ!」

「うあつと!な、何するんですか八神先生!」

「剣を構えろ」

「いやオレ、平和主義なんで」

「さっさと構えろ」

「いやだからオレは平和主義」構えろ」はい……（泣）」

近くに立て掛けた竹刀を手に取り構える。

「剣以外でもいい。先に一発入れたら勝ちだ」

「出来れば、やりたくなかったなあ……」

「フツ、では行くぞ！」

知的好奇心だか何かに刈られた眼でオレを見る。まるでバトルマニアじゃねーか。

「そおいつ！」

「はあっ！」

木刀が幾度もぶつかり合い、いつしか他のヤツらはこちらに注目していた。

「足元がお留守だぞ？」

「チツ」

八神先生強え……。

ウォラスさん使えるなら迷うことなくお世話になるトコだ。

「せいっ！」

「甘いっ！」

袈裟斬りで竹刀を弾かれた。

「あらっ……」

「……」

綺麗な弧を描いて地に落ちた。

周りからおくという言葉と共に拍手する。

「さっすが八神先生、強いなあ……」

「本気を出していなかったらどう？」

「そんなことキツパリ聞きます？」

質問の内容もバツサリ。先生らしいと言えば先生らしい。今日初めて会ったけど。

「剣が暴れたがっていたのを必死に抑えていたな」

「さて、どうだかな……」

昔、色々あったのさ。

「だが、強い」

いや強くないっす。間違った語釈すな。

「テストロッサ、次はお前にでも相手してもらおうか」

「はい、シグナム……じゃなくて先生」

さらば〜せんせい〜

たびだ〜つ人は〜

たいい〜くきよ〜い〜ん

シ〜グ〜ナム

即席で考えてはみたが、何とセンスのない歌なんだろうか？ 作詞者
作曲家歌手の方に失礼だ。なんかスンマセン。

とりあえず八神先生はテストロッサさんと共に別のトコに消えてし
まった。

「おい」

「？」

誰だっけこのオレンジ頭……。

「山重孝太だっ！」

孝太って言うのかコイツ。初耳だなあ……。

「決闘を申し込むっ！」

「昨日やると言ってただろうが」

コイツ、人の話聞いてんのか？オレが言えた筋じゃないが。

「ペナルティ付きでどうだ？」

「は？」

「負けた方は、勝った方の言い分を1つ聞く」

「あ〜」

昔からそういうのには縁がないのに。

「お前、願ひ事はあるのか？どんなことでもいいぞ？オレには金も名誉も女もあるしな」

何もかもがあるから威張る。残念な子だ。

「ないね。強いて言えば不変の平穩、だね」

「そうかいそうかい、オレの願ひも言っただろう」

オレの近くに歩み寄り、耳元で囁く。

「二度とオレのなのは達に近づくな」

「コイツ、今何て……!？」

「今、何て言った……?」

「聞こえてなかったのか?なのは、フェイト、はやて、アリサ、す
ずかに近づくなと言ったんだ」

「許さねえっ!」

「ま、勝つのは僕だけどね」

「言ってる」

Life・5 転校2日目で決闘とか何があった

「さて、僕は応援の方に挨拶にでも行こうかな。君も行ってきたらどうだ？」

「……………」

そもそもいるはずもないのに応援に挨拶出来るかってんだ。転校2日目で味方なんていやしない。

「ホント、孤独な奴は可哀想なものね」

「あ、アリサ、その言い方は……………」

相も変わらずあの5人だ。

「秀司君、1人？」

「そうだね、1人だよ」

あっちでは皆ワーキヤーやっててそれを山重が受け答える。

オレには出来ない芸当だ。尊敬したくない。

「で、聞きたいんだけどさ……………アイツ、何なの？」

オレンジ頭が言ってた5人に聞いてみた。

「あんなのただの変態よ！女の敵！」

「常にエロエロなオーラ漂わせてるしなあ」

「やたらと身体をベタベタ触ってくるしね……」

「私はあの人苦手かなあ……?」

「私も……」

アリスさん、八神さん、テストロツサさん、高町さん、すずかさんの順で述べてゆく。

取り敢えず言えることは、この5人から嫌われている、ということだった。

「さあ、始めようか」

「……」

「始めッ!」

八神先生の声が響き渡ると共に竹刀を振りかざした。

「ホアチャアッ!」

どこの中国の三流映画だよ。

「せいっ!」

「ドルアッ!」

「はっ!」

「ふんっ!」

竹刀と竹刀が幾度もぶつかり合う音が体育館に響き渡る。

「そりゃっ!」

「たあっ!」

山重を壁に追い詰めた。ここから押し切れば、勝てる!

「ウラウラウラウラウラウラアッ!」

オレの竹刀が火を吹くぜいっ!ヒヤッハーツ!

怒濤の七連撃を見舞うが、怒濤の防御で全て弾かれる。

「終わりだな」

「何?」

そう言われた瞬間、山重が視界から消えた!ヤツは決してノーマルスペックなヤツではなかった!

「そおいつ!」

背後から竹刀が来るのがわかった。

「ナメんなコラアッ！」

後ろを足で蹴る。当たった感覚があり、山重が後退りしていた。

「せいっ！」

キーンコーンカーンコーン

「それまでッ！この勝負引き分けッ！」

渾身の突きを放つが、八神先生が試合終了の宣言したので終わった。

「ふん、命拾いしたな」

あのヤロー調子こきやがって……。

「……」

【ほら、寝てないでペンを動かさない】

「だって、わかんねえんだもん……」

目の前にはテキストとノート、手に持っているのはO・J・Cのシヤープペン。そしてテキストの横には

【そこはX＝3じゃなくてX＝8よ】

ウオラスだった。

【全く、まさかこの私が勉強を教える時が来るなんて……】

「コラそこ、愚痴るんじゃない」

【コラそこ、サボるんじゃない】

「……はい（泣）」

ダメだ、言葉じゃウオラスに勝てねえ……。

【それにしても転校2日目で決闘だなんて……あなた、何かしでかしたの？】

「ぜんっぜん身に覚えがない！」

【それ、胸を張って言う所じゃないわよ……】

その頃、アルヴァニスタでは……。

「何だ、貴様等は？」

「我々はアルヴァニスタ魔物研究部の者だ。急を要するので、今すぐ国王陛下にお会いしたい」

門の前で人が溜まっていた。

「ダメだ！陛下は今、ユークリッドからの使者のタスク殿との面会をなさっているのだ！」

「良いから早く通せ！事は一刻を争うんだぞ！」

「だから何度言ったらわかるんだ！ここから先には」

「どうなさった？」

城の中から偉そうな人が現れ、護衛の人も後ろから現れた。

「た、タスク殿！こやつらが陛下に緊急でお会いしたいと」

「用件は何だね？事によっては私も協力しよう」

「タスク殿！」

タスクと呼ばれた人はそれを完全無視し、彼らの言うことに耳を傾ける。

言い放たれたその言葉は、その場にいた人間の空気を凍りつかせたのだった。

数分後、王室では

「陛下っ！」

「どうなさいましたかタスク殿？忘れ物ですか？」

「実は、この者達の話聞いてやってほしいのです」

タスクと呼ばれた人が頭を下げて頼み込んでいた。

タスクは1人の男を前に連れてくる。

「話を聞こう」

「単刀直入に言います。時空戦士の笹原秀司とロンドリーネ・E・エッフェンベルグが消えました」

Life・6 日曜日はダラけるためにある

転校してから初の日曜となった。

オレはゆったり起き上がり、リビングへと向かう。

「……そういえば、ロディ姉いないんだっけ」

昨日の夜、バイト先から電話があつて午前中はいないとかなんとか……。

「私ならいるけど?」

「……あらっ?」

真横ではコーヒーを飲むロディ姉の姿が。だからバイトサボったら給料出なくなるって。

「時計見てごらん」

「んあ?」

まだフラフラする頭をどうにか耐えて時計を見た。

「3時ねえ……3時……3時っ!??」

3時だった。しかも午後。

「オレの貴重な休暇がああああっ!」

思わず叫んでしまった。「近所さんうるさくて」めんなさい。

「散歩も悪くないね」

【ハア……】

買い物ついでに散歩に行ってみた。ウォラスも何故か同行している。

「ため息つくなよ」

【クレメンテ老みたいなこと言わないで。虫酸が走る】

「褒めるなよ」

【照れないでちょうだい】

クレメンテ老、とかいうおじいちゃんが誰かも知らないが。

「あれ？秀司じゃない？」

「誰かと思えばアリサさんじゃないか」

今日はストレートか……。

しかし、残念ながらストレートなら黒髪と決めているのでストライクゾーンには……いや、何でもない。

「あんだ、なにやってるの？こんなところで」

「晩飯の買い物ついでの散歩。どうだいオレの命の恩人様、晩飯食つてくかい？」

アリスさんとずかささんはこの世界に来てすぐのときに世話になったからな。礼をしておかなければ。

「私には専属のシェフが作ってくれる最高級のご飯あるから結構よ」

「庶民が作るゲロマズ飯は食わねえってか」

「だって、昼がバナナやらキュウリやらだったら料理出来ないのが目に見えてるでしょ！？」

「それ、そもそも料理じゃなくね？食材じゃね？」

「う、うるさいわね！何よ！この優男！」

「優男とは何だよこの般若！」

「女顔！」

「んだとゴルアッ！！」

周りから見れば迷惑以外の何物でもないだろう。何かごめんなさい。

アリスさんとも別れ、やっとの苦勞でたどり着いたスーパーハナ

サ。

「遠かったぜイ……」

【お疲れ様】

店内に入ると程よく冷房が調整されており、程よく汗をかいたオレには天国に思えた。しばらくここから出る気にはなれない。

「さて、今日の晩飯どしよか」

【今更？】

アリスさんとの痴話喧嘩おかげで全然気にも止めなかったが、今更だ。

「今日はクリームシチューにしようかの」

【変態オヤジの真似はやめて。虫酸が走るわ。】

変態オヤジ、と書いてクレメンテ老とルビが降ってあるのはまた別の話だ。

【今度変態オヤジ（クレメンテ老）の真似をしたら口を縫い合わす】

「何という死亡フラグ……あれ、あいつサリーだっけ？エンディケスだったっけ？……どうだったか知ってるか？」

【知らんがな】

「なあウォラス」

【何よ？】

「オレ、何か悪いことしたっけ？」

【……してないと思うわ】

「じゃあ何でいきなり人消えるの？」

先程まで周りにいたスーツを着たおっさんや子供と手を繋いで歩いていた親子すらもない。

青い空はいつの間にか灰色に変色して、所々に別の色がポツポツとあるだけだった。

【……】

「何か言えよっ！」

Life・7 犬の襲はちゃんとしておけ

「ウォラスさん、オレ何かヤになってきたんだけど」

【愚痴る前に走る！あいつ等に追い付かれるわよ！】

オレは今、絶賛全力疾走中。

1つ言いたいんだが、どこから湧いたあの魔物。

「GUOOOOOOO！」

巨大な犬のような物体がオレを襲う。大体人間3人くらいのデカさだ。

「たーしーけーてー」

【そろそろ反撃するわよ】

「おま、何言ってたんだコラ」

【フレイムドライブ！】

「聞けよ」

【続けて行くわよ！フォトンブレイズ！】

「だから聞けって」

【わかったから早く構えなさい！】

理不尽だ……。何もわかってないじゃないか。

仕方がないのでウオラスを構えた。

【切り裂け！ストリームアロー！】

今だっ！

「そるあっ！」

巨大犬を斬り裂いた。

「かなり肉厚だな……」

【焼いたら美味しいかもね】

「その前に斬りづらいんだけど」

【エクスポロオオオド！】

何か降ってきたと思ったら、急に目の前で爆発、一瞬にして肉は消え失せた。

「火力が強すぎて焼くどころか炭すら残らなかったんだが」

【試食はお預けね】

「……泣けるぜ」

オレはスーパーのビニール袋を持つと、そそくさとその場を後にした。

それから10分後。

金髪の人と栗毛の人がいた。

「あれ？」

フェイトは道路を歩いていると、不意に声をあげた。

「どうしたのフェイトちゃん？」

「この道路、アスファルトが溶けかけてるよ」

靴の裏には若干ではあるが、アスファルトがこびりついていた。

フェイトは地面に屈みこみ、道路を触る。

「まだ暖かい。ここで何らかの高火力魔法が発動したんだと思う」

「これ、魔力変換の炎持ちの人が原因なのかな？」

「多分。私もなのと同じこと考えてた」

「「わからない……」」

二人は唸るように言った。

朝　それは至福の時。

オレは朝、学校につくと本を読み始める。

「……………」

ホームルームが始まるまでは基本ノンストップ。

「ホームルーム始めるぞ」

先生が現れ、至福の時終了。

幸せはすぐに終わるようこの世は作られている……………とかなんとか言
つてみたが、やはり柄にも合わなかったり。

「じゃ、ホームルームは終わりにするかな。テスト近いからちゃん
と勉強しておけよ。特に笹原」

「ギクツ!?!」

何かお疲れ、オレ。

「何故だ……………何故秋なのにこんなに暑い!?!」

「知らねーよ！どうせ地球温暖化とかの影響で暑いんだろ！？」

「てめーら暑い暑い言ってるじゃねーよ！更に暑くなるだろうが！」

「お前も言ってるじゃねーか」「

「んだとゴルアッ！」

「世界には修造が何人いるんだよ……」

暑さを耐え凌げないヤツらが口々に言い始めた。

オリーブヴィレッジにも遠く及ばない暑さなのに何を言う。

「きょーはプールにはいりたいきぶんだねーフェイトちゃん」

「そうだねーなのは」

隣と前も相当グダっているな……。そしてプールとは何ぞ？

その時先生が教室に飛び込み、こう言った。

「着替える！暑いからプール入るぞ！」

「「「「「ヤッター」ヨッシャー」ッ！」「」「」「」

クラス全体が一丸になった瞬間だった。だからプールとは何ぞ？

「今日もお疲れ、オレ」

プールの端では、オレが浮き輪に浮きながら青い空を見上げていた。

「空が青いなー……」

あ、あのくもそふとくりーむみたい。

若干現実逃避しているが、なに、気にすることはない。

因みに、皆はなんやかんややって遊んでいる。皆元気だなー。

「クレスさん達、今頃何してんのかな……」

この世界にはいない、かつての盟友。もう二度と会うことのできな
い友。

「会いたいな……」

空の色もあの世界とは変わらないのに、何故こつも違つのか。気に
なつて仕方がない。

「誰に？」

「うっわっぶー!？」

聞き覚えのある声と共にやってきたのは大量の水。

それと同時に誰かの手によって浮き輪から正面に投げ出される。

(出るオ！ウンディーネ！オレを助けてくれ！ウンディイイイイネ
エエエエエ！)

しかしなにもおこらなかつた！

現実とは非常に非情だと思った瞬間である。シャレにもあらず。

そしてもがきつつ少しずつ前進し続けるオレ！頑張れオレ！正面の誰かに助けてもらえ！

「なのは、流石にやりすg」

刹那、オレの手が誰かのブラに引っ掛かり宙を舞う。シツクな感じを醸し出している黒のブラか。チョイスイイと思う。オレも黒好きよ黒。

「えっ」

ってそうじゃないんだよ。その話はまだしたいくらいだけどそうじゃないんだよ。

弾力のある白い肌。

顔を真っ赤にして恥ずかしがる顔。

ってそうじゃないんだよ。その話はまだしたいくらいだけどそうじゃないんだよ。

弾力のある白い肌。

顔を真っ赤にして恥ずかしがる顔。

そして隠しきれない程自重という言葉を知らず育った胸。

一言で言つと、秘境。あれは間違いなく世界遺産レベルを軽く越してる。

誰の顔かなんて一瞬過ぎてわかんなかったけどな。取り敢えず美人
ってことで。そうでなかったら許せん。

「きゃああああっ！」

被害者怒りの鉄拳炸裂。あべしである。

これは罨だ！これは溺れさせたヤツらがオレを陥れる為に仕組んだ
罨だ！

水にプカプカ浮いてる黒のブラを見ながらオレはネバーランドに旅
立ったのだった。

目が覚めた。ええ、パッチリと。

目の前には知らない天井……ではなく、科学薬品の類いの乗ってい
るデスク。

そして何かを調合する白衣を纏ったボブカットの薄い金髪のオネー
サン。ウフウフ言ってる、正直、何だか危なっかしい感じがしてな
らない。

「アレとアレを混ぜれば試作段階は完成ね。ウフフフ……」

注射器持ちながら喜ばないでください。怖いから。

「あ、起きたのね？」

注射器にさっきの入れながらこっちに近づかないでください。怖い
から。

「今日は災難だったわね」

そう言いながら勝手に人を人体実験の被検体にしようとしなくていいだけだ。軽く死ねるから。

「さて、お注射します。ちょっと待ったあつ！」!?」

「何しとるんやシヤマル！」

「は、はやてちゃん!?それに皆も!?!」

相変わらずの5人の登場。5人で出てくるのがマイナーになりつつある今日この頃。

因みに起きてから1度も喋っていない。オメーら主人公差し置いてなに発言してんだ。

これじゃ、

主人公空気化 みんなに認知されない 日々の生活が嫌になる 空気がならないよう修行に出る いくえ不明

がオチというのが目に見えているだろうが。

「あ、あの〜はやてちゃん？」

「八神さんどうしたの？」

「シヤマル、今日の晩御飯抜きな」

「そんな！」

「聞いて」

どうやら主人公空気化問題が深刻らしい。

「あんた、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃない、問題だ」

主に精神面が。

空気化も大概にしていただきたい。正直、温暖化よりも空気化って深刻だろ。

「ちっきはごめん」

「ごめんなさい」

「すまん、やり過ぎてもうたわ」

「私も謝っておくわ」

「ごめんね」

「は？」

コイツらが何言ってるのかサッパリングな件。

「という訳なんです」

成る程成る程。きゃつらか。オレを陥れたのはきゃつらか。

何が起きたのか簡潔に説明すると、

史上最高の秘境を超至近距離で観察　テストロッサさんの　渾身の右ストレート！　撃沈

「ほんつとつにごめんなさいっ！」

高町さん達が腰を90度に曲げて謝る。うん、良い曲がりかただ。クッキリしてる。

「てかマジですみませんテストロッサさん。こんな安い頭を下げて許してもらえぬならいくらでも下げますからマジで許してやってください」

今のオレは、床に飛び降りてorzの格好。

巷で言う土下座だ。

こんな安い頭を下げて許してもらえぬならいくらでも下げる。頭を上げると言われても下げる。

「あ、頭を上げて」

「はい……」

あ、上げちった。

「私は怒ってないから、殴った私を許して下さい」

「……はい」

仲直り成功。意外とアツサリング立った気がしてならない。

「ただしその4人、テメーらはダメだ」

「……なんだとおっ!?」「……」

その後、某緑髪の幼女閻魔様の如く説教してやった。勝るとも劣らない長さだったと思う。

やはり慣れないことはやるべきではないと実感した瞬間である。

今度からは閻魔様にでも任せようと決意した次第。ならば閻魔様がどこに生息しているか探さなくては。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9548w/>

リリカルマジカルなんだってエーッ！？ 叙情的な幻想ってなんなんだっ！？

2011年10月12日08時01分発行